2023
野洲市教育研究所だより
No.14
2023.9.12

就学前教育講座②　８月２１日(月)中主幼稚園

保育園・こども園・幼稚園の先生方２６名の参加でした。「架け橋プログラムの取り組みについて」という演題で、岐阜聖徳学園大学教授の西川　正晃　先生に以下の内容で講演していただきました。

まず、「架け橋」とは、保幼と小学校が共に関わり合うという意味が込められています。

文部科学省の幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会では、これまでの保幼小連携の取り組みから以下のように述べています。

課　題	幼児教育の質に関する認識が社会的に共有されているとは言い難く、小学校教育の前倒しと誤解されることがある。
目指す方向性	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 項目）」を手掛かりに「社会に開かれたカリキュラム」の観点から、小学校以降のカリキュラムと接続し、関係者と認識を共有する。

では、具体的に何をどうすればよいのでしょう。

まず、保幼の先生と小学校の先生が互いに参観し、**「10 の姿」の観点から**何に長けていて、何が必要なのかを共通理解することです。そしてそれが、**重点項目**になっていきます。

幼児の自発的な活動としての**遊びを繰り返し行う**ことで、一人一人の発達の特性に応じて、「10 の姿」が育っていくものであり、重点項目であるからと言って、重点的にそれだけを個別に取り上げて指導するものではありません。あくまで、子どもの主体的な遊びの中で見られる「10 の姿」の中で絞り込んだ重点項目を育てていくことが重要であり、保育者の保育技術が試されます。

それは、小学校の「主体的、対話的で深い学び」につながるものです。子どもが楽しいと感じる「遊び」が、主体性を育みます。小学校では、主体的に「遊び」を続けてきた子どもたちの主体性を伸長するカリキュラムを構築する必要があります。1 年生の入学当初の学校たんけんでクラス一斉に見て回るような授業では、せっかく就学前に培ってきた主体性を育成することにはなりません。

「10 の姿」の中から重点項目が決まったなら、それを **0 歳児から中学校まで段階的に**「めざす子どもの姿一覧表」として示します。それをふまえて、実際の保育・授業で 10 の姿の重点項目の観点で「実践シート」に書き込んでいくと、具体的な子どもの言動として見えてきます。

大切なのは、10 の姿の重点項目で子どもを見取っていくことです。これまでのように、保幼小連携・接続といえば、まず交流というのではなく、参観や研修では、「10 の姿」の重点項目で、見て語り合うものであれば、あえて交流の活動を入れなくても「架け橋プログラム」の意義は達成されます。もちろん交流活動にも自己発揮、期待・憧れ、意欲などのプラス面はありますが、最重要事項かどうかです。

このように考えていくと**「架け橋プログラム」の最終目標は、保育・授業の改善・発展など「質の向上」**だといえます。

西川先生ありがとうございました。

今回の話から「架け橋プログラム」は、保幼小に留まらず、コミュニティスクールにつながるものであることが分かってきました。